小説：089タロー
表紙イラスト：秋月からす

渚

NAGISA

ビーチに悶える淫堕の女神

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『渚 ビーチに悶える淫堕の女神 前編』
『渚 ビーチに悶える淫堕の女神 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

渚
NAGISA
ビーチに悶える淫堕の女神
089タロー
表紙／秋月からす
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

みね　なぎさ
峰　渚

新鋭の若手ビーチバレー選手。明るく快活で、実力も右肩上がりで注目を集めている。

さわがきあさみ
沢垣浅海

渚の相棒のビーチバレー選手。おっとりしたタイプで、渚とは戯れのレズ関係。

よこい　わたる
横井　渡

女癖が悪いと評判の男性ビーチバレー選手。

もろはし　しゅうじ
諸橋　周二

横井の相棒の男性ビーチバレー選手。盗撮が趣味。

『さあ、この雌乙ヶ浜ビーチバレー、第一戦目もいよいよマッチポイント！　照りつける太陽の下、勝利の美酒を飲むのはいったいどちらか⁉』

焼けた砂原。ツバを飛ばす司会者。そして大勢のギャラリーの声援が、この海辺をさらに熱くさせていた。

砂原にはラインが引かれ、中央には枠を分割するネット。

そして各々の領域内では、ペアを組むチーム同士が互いに睨み合っていた。

「ちぃ、いい気になりやがって。てめえらなんかに負けるかよ」

ひょろりとした長身に黒いブーメランパンツをはいた男が、苦々しげに吐き捨てた。短髪にタレ目の、どこか軽薄な印象を持つ青年である。

彼は水着姿で、まるで海辺にナンパをしに来た風体だった。そして彼と組むもう一人はというと、こちらは短パン水着の体格のよい青年ではあった。

「そ、そうだ。女なんかにまで負けるなんて、俺もいやだっ」

しかし声音もどこか萎縮気味で、ボサっとした長髪に張り付いた顔も気弱なヘビを思わせるものだった。

軽薄そうな男に陰湿そうな男。こんなペアが客の歓声を浴びるわけがない。

そして、観客の注目するもう片方のペアは、男とは対照的に実に輝いていた。

「いくわよ渚、はっ！」

ボールが高く投げ上げられ、それを追って水着姿の女体が飛ぶ。陽光を背に受け、黒のアップヘアが鮮やかに広がった。

宙で弓なりになるボディ。スポーツタイプの青色のブラにパンツ。優しく膨らむ胸とお尻が、女性特有のまろやかさを魅せていた。

が、その美も一瞬のこと。右腕が鋭く振りぬかれると。

——バーン！　ヒュン！

「うおっ⁉」

鋭い音と共にボールが打たれ相手側に飛んでいく。ナンパ男は目を剥き慌てて腕を伸ばした。

強烈なジャンプサーブだったがギリギリレシーブは間に合った。しかし拾うのが精一杯で、スパイクチャンスもなく女性側へと舞い戻る。

そして。

「渚！」

「オッケー浅海、はっ！」

気勢と共に新たな女体が宙へ飛ぶ。まるで太陽を追うように。

ネットすれすれに舞うのは、ショートヘアの美女だった。スポーティな赤い水着の、若く躍動的な女性である。

飛び上がった肢体は伸びやかで眩しく、弓なりになって一瞬周りの心を奪う。細い腰はキュッとくびれ、ふっくらと肉付く臀部も一目でスタイルのよさを知らしめる。

さらに右手が大きく振りあがると、仰け反る勢いのまま、ぶるんっ！　と胸元が跳ね上がった。

それは、女体に実った丸みある乳房だった。ヤシの実のように形よく膨らみ、また甘い果汁をたっぷりと秘めていそうな美しい巨乳である。これが宙で柔らかに弾け、客の視線にもついつい熱がこもった。

小麦色の肌さえ綺麗な、まるで南国のマーメイド。睫毛の下の勝気な瞳も清々しいほど美しい。

が、その美もまたほんの一瞬。弓なりの肢体が宙で溜めを置き、

「てやあっ！」

――バシィィン！

「うはわあっ⁉」

痛烈なスパイクが繰り出され、ボールは鋭く風を切った。と同時にヘビ男は動いたが、とても間に合うものではない。自軍のコートに球は打ち付けられ、

『決まったあ！　峰選手得意のスパイク一閃！　ゲームセット、峰・沢垣チームの勝利だあっ！』

テント内で司会者が宣言し、ワアッ！　と観客も沸いた。
『さすがビーチの女神！　期待の新人ペア！　男相手でも見事な活躍！　今をときめく彼女たちに盛大な拍手を！』
「「ワ～～～っ!!」」
照りつける日差しの下、砂浜のコートが歓声で埋まる。
そしてビーチバレーは、女性ペアの勝ち鬨にて幕を下ろすことになった。
「やったわね渚！」
「もちろんよ浅海！」
渚と呼ばれた赤い水着の美女が、浅海と呼ばれた青色の水着美女に駆け寄る。青の美女は優しげに、赤の美女は明るく勝利を称えあう。
そして赤い水着の美女渚は、ガックリとうな垂れる男ペアに向かって吼える。
「どうだ横井、諸橋、参ったか！　女だからって甘く見ないでよね！」
指差す彼女の茶色のショートヘアが、汗を光らせて眩しかった。
「くそっ、あのアマぁ、ちょっと上手いからっていい気になりやがって！」
更衣室内で壁と格闘しながらナンパそうな男、横井が怒鳴った。
「し、しょうがない。あいつら、新人のクセに実力はあるからさ」

椅子に座ったままヘビ男、諸橋がぼやく。しかしさすがに不機嫌そうではあった。
彼らはビーチバレーの選手だった。まだ若手として売り出している最中である。
しかし残念ながら、鳴かず飛ばずの状態が続いている。しかも、横井の女癖の悪さや諸橋の陰湿そうなルックスも相まって、観客からの評判さえ悪かった。
そこへ現れたのが先の対戦相手の、峰・沢垣ペアである。
彼女らはさらに若手ながら、メキメキと頭角を現してきた売り出し中の選手だった。実力もさることながら、美しいルックスも重なってファンからは女神などともてはやされている。特に峰渚のほうは活発で美人でスタイルがよく、男性からも大人気だった。
「せっかくボコボコに負かして、あのダイナマイトボディもいただいちまおうって思ったのによ。何で女のクセに上手いんだっ」
本来、この競技も男女別である。しかし今回はエキシビションマッチということもあり、特別に男女の枠を超えての試合となった。そして横井は久々の勝ち星を得ると同時に、落ち込んだ渚を勢いに任せて篭絡してしまおうと考えていたのだ。
彼は、女性相手なら負けるはずがないと思っていた。だが、実力右肩上がりの女性と右肩下がりの男では勝敗は見えていたのだ。
結局名も売れず女もモノにできず、逆にバカにされてしまった。それが悔しくて、着替えもそこそこに地団駄を踏む横井。

（っ？　く、こいつっっ！）

たった一言が強気な美女の意気を挫く。元々レズの証拠と引き換えに破廉恥な水着を着ているのだ。足元を見られて当然だった。

おかげでグッと怒気を飲み込むしかない渚。

そして、さらにローターに刺激されると思わず腰をくねらせてしまった。

――ブゥゥウン、ヴヴヴヴ……！

「あぁっ？　んっ、くぁぁ、んん……！」

（いやっ！　あ、アソコで、動いてるっ）

電動の小器が震えると、隠れた恥裂に微細な振動が伝わってくる。急にオナニーを始めたみたいで戸惑ってしまう。

当然、恥ずかしさと淫らな感触に腰がざわめいて力が抜ける。意識と感覚が、じんわりと試合から離れていく。

だが――正直なところ不快ではない。二十歳の乙女は身体も熟しており、敏感な入り口への微刺激に性感を揺り起こされていた。

「ぁぁ、んくっ、そんな……」

Gストリングのパンツの股布が、小さく揺れて恥丘を撫でてくる。もちろん内側は生の股間なので、ラビアはじかに愛撫された。

えっちシーン試し読み ここからスタート

しかもヒモ同然なので食い込みも強く、亀裂の奥やアナルまでもが擦れるのだ。これには堪らず手を伸ばしてしまう。
「お、おいおい、いきなりどうしたんだ？」
「パンツに手、伸ばして。何か、いやらしいぞ？」
事情を知らない観客は当然不審そう。だが、眉根を寄せて腰震わす美女の様子は、妙に悩ましくて劣情を煽った。
（だ、だめっ！　しっかりしなきゃ、今は試合中っ）
客のざわつきを悟って渚は自制を試みた。そして再会したビーチバレーに集中しようとする。
だが、レシーブに入った際、屈んでパンツがキュッと食い込み、
――ッヴヴヴヴゥ……！
「あくぅん⁉」
甘い刺激が腰砕けさせる。フィットした股布がより奥の粘膜を刺激したのだ。
おかげでボールはあらぬ方向へ飛んでしまう。相棒は必死にフォローに入るが、とても間に合うものではなかった。
「渚、どうしたの？　あんなボールを落とすなんて」
再び浅海が心配してくる。こちらの実力を知るため当然だろう。

それでも、真実は告げられず赤い顔を振るしかない性感美女。
「はぁ、っ、大丈夫っ……」
どうにか立ち上がり構える。が、頬に浮いた汗は、どこか甘ったるい芳香を放っていた。むちむちした太腿も軽く震え、まるで発情を堪えているよう。惑う瞳も妙に熱っぽく、唇からは甘い吐息が漏れていた。
（くぅっ、こ、腰に、力が入らないっ）
なおも玩具は蠢いており、微弱な振動で淫唇を揺さぶっている。不本意だが快感で、淫蜜が滲みてきてしまいそうだ。
思わず内股になりキュッ、と恥裂を締める渚。だとしても、今なおニヤついている横井や諸橋を見ると、闘争心が燻ってくる。彼らの目には『感じてるんだろ？　正直に言えよ』と書いてある気がしてならないのだ。
（ま、負けるもんか。そうよ、こんなの、ただ気持ちいいだけじゃないっ）
身体の故障に比べれば何ということもない。そう言い聞かせて美女は再び試合に臨んだ。
そこからは、己との戦いだった。蠢く玩具が膣性感を脅かし、振動で媚肉を柔らかくしていく。食い込むビキニの中に甘い異物感を感じながら、懸命に足腰に力を込め続ける。
「っはぁ、はぁ、んっ、ぁぁ……」
「どうした？　気持ちよくって力が出ないか？」

「っぅぅ、だ、誰がっ」
前衛同士ネット越しに向かい合い、横井はニヤニヤと問うてくる。無論、睨みで返す渚。
それでも、時折膣が甘く疼いて妖しく股間をヒクつかせる。慰めを知る熟した花弁は、ゆっくりとだが淫らな刺激に応じて花開いていくのだ。
今やソコは感度を増して、ビキニの食い締めにさえ官能を覚える。光沢あるピンクは微かに湿り、Gストリングをより際どく彩っていた。
なおも我慢し続ける渚に、男は後ろに目配せして嗤いかける。
「そうかい。じゃ、コッチは感じるかな？」
と、後衛の諸橋もニヤリと笑んでパンツの中のスイッチを弄る。
すると。
——ヴヴッ、ヴィィイン！
「んひいっ⁉　んぁ、なにっ⁉」
今度は。胸を触られるような感覚があり、驚き両手で覆ってしまう。
だが、そこにはやはり何もなく、ただ三角布があるのみ。まさかと思いよく見てみると、またも水着が犯人なようだった。
（そ、そんなっ⁉　ブラにまでローターが？）
胸の先端に少しだけ硬い感触。これをパッドだと勘違いしていたため、突然の作動に動

揺を隠せない。
しかし仕込まれた玩具は、また確かな恥性感を猛らせてくれる。
「ぁぁ、んはぁぁ、っ！　ち、乳首、がぁ……」
（す、擦れちゃうっ。ローターが動いてっ）
一辺5センチほどの三角布の裏、密かに火照った乳輪が優しくいじらしく微擦られるのだ。突起が徐々に感度を上げて甘い恥じらいが強まってしまう。
しかも何より。布地が少ないためか、振動は傍からも窺えるほどなのだ。
渚の乳房はたっぷりと実ったFカップ。それが今、ヒモのようなビキニのローターに揺すられているのだ。柔らかい乳肉がぷるぷる揺られ、艶かしい波紋を魅せてしまう。
――ヴヴ、ヴヴヴヴ。
――ぷるん、ぷるぷるぷるるるっ。
「ぁあっ！　ぃ、いやぁっ」
丸々とした巨乳に甘い波が生まれていく。先っぽが擦られて小粒がこね回されていく。ビキニも動いて妖艶なのに、白い水着跡も震えて驚くほど扇情的だった。
それでなくとも膣口が刺激を受けているのだ。同時にニップルまで刺激されては、二十歳の女体は本能的な悦びに身悶えてしまう。
「ぁ、あぁぁ、うごぃ、てぇ……」

（だめっ！　今されると、ムネまで気持ちよくなっちゃうっ）

渚の腰が悩ましく捩れ、抱えた乳房が絶え間なく震える。中の突起が軽くシコって目覚めた性感がより高まっていく。

普段勝気な乙女のそんな色香に、観客もさすがに喉を鳴らす。

「な、何なんだよ渚ちゃん。すごく、色っぽい」

「てか、試合する気あんのか？　さっきからエロ水着着てクネクネしててさ」

ビーチバレーに色気あるビキニなど、とても普通とは思えない。そこへ恥女のように身をくねらせれば、周りは不審がって当然だった。

そして、

「へへ、そ、それっ！」

ここぞとばかりに諸橋がサーブを放ってくる。ボールは浅海によってレシーブされたが、次いで渚がジャンプトスに入ると、

――ヴィィイン、プルプルッ。

「やんっ⁉　はぁぁっ……」

腕を離した途端、胸のお肉が柔らかに躍って甘い悲鳴を漏らしてしまう。自由度を増したローターがより小刻みに乳首を刺激してきたのだ。

おかげで彼女は胸を反らし、宙で巨乳を晒す羽目になってしまった。たわわな果実が上

に弾け、ビキニのヒモから零れ出そうになる。
「な、渚っ!?」
当然、ボールは誰に拾われることなく落ち、女も同様に砂浜にへたりこんでいた。驚く相棒が呼びかけるも、彼女はクッ、と眉根を寄せるだけ。
(ちっ、乳首、気持ちいいっ。これが、大人の玩具?)
浅海とレズ関係な渚だが、こういった手合いに手を出したことはなかった。淫戯のときも、優しく指などで愛撫するだけ。
ゆえに、機械的かつ断続的な性刺激には疎い面もあった。未知の性感への耐性の薄さを露呈しているのである。
しかも。
(み、みんなに、見られて。わたし、すごく変態だって思われてる?)
間違いなくスポットライトは自分が浴びている。どうであれ、誰もが自分に釘付けだ。
活躍とは異なるものの、皆の熱い視線が。
(ぞ、ゾクゾクしちゃう。わ、わたし、みんなに見られて、いい気分になっちゃってる……)
砂に膝つき肢体を抱いて、まるで陵辱を怖れる少女のよう。強気な瞳も今は垂れて、脅える子犬のような悲哀さえ魅せる。それでも、紅潮した頬と魅惑の肉感美、汗濡れた肌が雌の芳香を香らせていた。

とはいえ、性欲が湧いた今の身体ではもう試合に臨めそうもない。それに、

「どうしたの渚？　あなた変よ？」

と、ポニーテールの相棒もいよいよ懸念を示してくるのだ。真実など語れないが、このまま足を引っ張るわけにもいかない。

「はぁ、はぁ、あのっ、タイムをください！　砂が、水着に入っちゃって」

追求を避けるように渚。

もとより砂浜の競技で水着なのだ。そういう事態など珍しくないし、女性プレイヤーならではの配慮を求めたのだ。

審判も訝りながら承諾してくれる。

そして渚は、観客と相棒の目、またニヤつく横井・諸橋から逃げるように、トイレへと走ったのだった。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

熱持つ身体を引きずるようにして渚は個室の便座に座り込んだ。

豊かな乳房が大きく起伏し、ふくよかな腰も微かにヒクつく。小さなデルタのブラと縦ヒモのようなパンツは、まるでセクシーランジェリーのような色気があった。

慌てて入ったことから、便意を耐えていたようにも映る。が、火照り赤らんだ頬が、そ

「とんでもねえな、始めっからその気満々じゃねえか」
秘密を知った観客も、さらに嘲弄を強くする。今やビーチの女神は、客にとって、恥女以外の何者でもない。
そして彼女は、なおも玩具に責められて強引に昇り詰めていく。
「ひいっひいいあひいいいっ！　りゃめっもおりゃめえええ！　かんじっ感じしゃううううっ！」
――ヴィヴィイイイッ、クリクリクリッ。
敏感な肉芽までこね回されては腰が激しく痺れてしまう。皆に見られてそこまで勃起させてしまう。
しかし包皮がヌルリと剥けて、中から小さな粒を差し出す。疼く女体は本能が頂を望んでいたのだ。
「ほうら、勃起クリトリスも弄ってやるぜ」
「ひいいいいいいいいいんんっ!!」
もう、わけが分からない。すでに拘束は弱まっているのに足が言うことを聞かない。浅ましく股を突き出し仰け反りながら高みを目指すだけ。
腰が前後に激しく躍り、太腿も絶えず震え続ける。アナルもすっかり腸液で蕩けてビーズを何度も振り回していた。

ちょっちシン 試し読み ここからスタート!

そして、数珠状の球がグッと掴まれると、
「おらっ、イっちまいな！」
――ずぼっ！　すぶぼぼぼぼおっ！
「ぎいいいいいっ!!?　おしりイグウウううっっ!!」
――ビクビクビクビクウウウッッ!!
一気にビーズが引き抜かれて一気に達してしまう渚。目を裏返して強い絶頂に悦び狂う。
さんざん刺激を受けた腸は、すでに快楽器官へと変わっていた。排泄を耐える冷感と排泄する解放感とが混ざり合って、本能の快楽として昇華したのだ。
そこを球に刺激されては、膣へも性感が伝播してとても耐えられるものではなかった。
「ひ、ひぎぃ、あひっ、あひっ！」
（あ、あはは……また、イっちゃったぁ。おしり、ま◯こぉ、気持ちよすぎるぅぅ）
舌がだらんと垂れ下がり、何ともだらしない顔となる。痙攣して男に背を預ける。そこにはもう、ビーチの女神とまで称えられた矜持もプライドもなかった。
「へへっ、もう完璧だな。こんなにヨガるとは思わなかったぜ」
横井にぶちゅっとキスされても、彼女に拒む意思などない。ねちっこく舌で舐め回されて、自らも舌を差し出していた。
「んじゅっ、はむじゅっ、えへ、あへっ」

ついに理性が砕け散った。秘すべき痴情を隠すためにより以上の痴態を晒し、失うものはすべて失ったのだ。

（も、もぉいいのぉ。頭、どろどろになっちゃってぇぇ。もぉどおでもいいのぉ……）

後は、相棒の秘密と共に堕ちるところまで堕ちればいい。そう思って、自らの未来を受け入れる半裸美女。

だが、しかし。

「うおおっ⁉　こ、こっちは生本番じゃねえか！　しかも浅海ちゃん！」

（……えっ？　あ、浅、海？）

不意に相棒が話題に上って壊れた理性を傾ける。

すると。

人波の向こう。男たちが取り囲む中に、見慣れた裸体が揉みくちゃになっていた。

「ひひ、渚もいいけどこっちもいいぜ。なんたって生でサセてくれるんだからな」

「んぐっ、うああっ！　いや、もう許してぇぇっ」

「だ、だめだ。じゃないと、あ、あの写真、ネットにバラまくぞ？」

「いやっ、そんな、あああっ！」

何ということだろう。客と諸橋に輪姦されているのは、間違いなく浅海だった。水着を剥ぎ取られ全裸にされて、口と背後を犯されている。

しかもどうやら、件のレズ写真で脅迫されてしまったようだ。同じ境遇の渚は、すぐにそれを理解した。

（そ、そんなぁ、浅海、まで……）

恐らく姿を見せなかった諸橋が脅したのだろう。これに客も乗じたというところか。

どうであれ、これで最後の希望まで失った。自分はどれだけ耐えようとも、誰も、自分すらも救うことはできない。

本来なら、約束破棄だと罵ってもよさそうなものだ。しかし、すでに壊れた女の理性はそんなことなど望んでいない。

「はぁ、はぁ、も、もっとぉぉ。もっと、気持ちよくにゃりたいぃぃ……」

ただ忘れたい。否、これを悪夢ではなく淫夢に変えたい。それだけを願って眼差しを蕩けさせる豊満美女選手。

「そうかい。じゃあ、こっち向いて足広げるんだ」

「は、はいぃぃ」

横井に命じられるまま、疼く肢体が自然と寝そべる。

存分に視姦された秘所が、沼のようにぬかるんだ恥裂が、男の前での開脚によって改めて差し出される。

おおっ！　と観衆がどよめく。際どいGストリングのために淫毛は剃り尽くされ、今は

真っ白な肉丘と細い亀裂を余すところなく見せているのだ。

さらなる愛撫を期待して胸を高鳴らせる開脚美女。だが、やはりと言うべきか。男の答えは、脱ぎ捨てられるパンツと猛々しい股間だった。

「へへ、やっと来たぜこの瞬間が。このムチムチボディは俺がいただくって決めてたんだ」

（っ!?　わ、わたし、こいつに、犯されちゃうんだ……）

いくら渚でも『それ』の意味するところは理解できる。黒光りし天を向く肉棒。太く、血管を浮かせてエラを張り出す男根。それが生の女膣に迫るとなれば、答えは一つだった。

――つぷっ、ぬぷ……。

「ぁ、ぁぁあ、お、おちんちん、がぁぁ……」

――ドキドキ、ドキドキ……。

仰向けになった女体の股間にゆっくりと亀頭がめり込んでいく。異物感が膣唇に広まっていく。

だが、色に堕ちた雌の本能はどこかでそれを悦んでいた。緊張はあるが、それ以上に歪んだ期待が膨れ上がっていく。

（ああくるぅ。わたし、とうとう……）

ニヤける男の顔すら、奪われる予感を高めてくる。鳥肌が立つような悪寒さえ、今の渚には恍惚だった。

そして亀頭が埋まった辺りで、肉の堤防がグッと押し退けられて。
——ぐぐっ、っっびつっ！
「っ～～～～!!　あああああっっ!!」
何かが破れた衝撃が走り、ふくよかな腰が一つ大きく跳ね上がった。痛みが駆け抜け瞳も大きく見開かれる。
そして濡れた肉裂からは、一筋の朱色がツツ……と音もなく伝い落ちた。
「ああん？　何だ、お前バージンだったのか。こいつぁいいや、噂の女神の初モノをいただけるなんてな！」
横井の顔も強い喜悦で歪んだ。彼にしてみれば、レズを楽しむ女が男を知らなかったという事実が、おかしくて仕方ないのだろう。
さらに男は、客にも自慢そうに振る舞った。
「見ろよ。ビーチの女神のロストバージンシーンだぜ？　サイコーの瞬間をお前らは拝めたんだ」
「す、すげえ、ぴちぴち処女の生本番なんてっ！」
「と、撮っていいっすか？　てか、撮るっす！」
——パッ！　パパパパッ！
間近で取り囲む観衆から多数の眩いフラッシュが飛ぶ。皆、渚たちのファンなためカメ

ラ持参率が高いのだ。
しかも憧れの美女の生セックスでは、勃起も顕に食い入るしかない。
（あ、あぁぁ、撮られてる。わたしのロストバージン、みんなに見られて……）
頭がぼ～っとしてきて不思議な陶酔感が湧き上がる。憎い男に処女を奪われたというのに。
おかげで渚は、トロンとした眼差しで観客を魅了していた。男に串刺しにされ、力なく横たわりながら、それでも頬を染めて女の色香を漂わせる。
豊かな胸が何度も起伏し甘い肉付きを誇張している。腰つきも豊かで艶かしく、ビキニの切れ端を絡めながらしっかりと男根を受け入れていた。
とても初めてとは思えない、何とも淫らな女の素肌。そして男の腰が動くと、
「んあっ⁉　んっ、んっ、あんっ、ああんっ！」
と、早くも悩ましい声を漏らして、細い腰をくねらせ始めた。
「おいおい、もう感じてんのかあ？　すげえな、バージンのクセにメチャいい反応しやがる」
「んんっ！　そぉ、そんなことぉぉ、んっ、ああんっ？」
――ずぷっ、ずぷっずぷっくちゅっくちゅっ。
粘っこい音を立てて膣がペニスに出入りされる。いよいよセックスの始まりだった。

横井の言うとおり、渚にとっては初めての経験だった。もとより男嫌いの気もあって、軽いレズ行為しか知らなかったのだ。

しかし、初の結合感触は予想以上に辛くないものだった。

（あ、あんまり、痛く、ない……これが、おちん、ちん……？）

さんざん刺激され濡れたためか、入り口はふやけて異物を遮る気配さえない。それどころか、まるで別の生き物のように雄のサオに吸いついているのだ。

さらに奥では、刺激待つ肉ヒダが男根にじっくりと擦られていく。

（あ、熱いっ。これ、硬くって、長くって、奥にひびくのぉぉっ）

口を喘がせウットリと陶酔する美女。今まで未開だった性感帯を、ペニスは存分に愛でてくれるのだ。痺れるような快楽がゾクゾクと背筋を這い上がってくる。

恐らくは、二十歳という適齢期とレズによる性への抵抗の薄さが、感度を育てていたのだろう。人生初の抽送にさえ甘い官能を覚えてしまう。

「はぁ、はぁ、あぁ、あっ、な、なかぁ、すごいぃぃっ」

首を傾げて悶える姿は途方もなく色っぽい。普段勝気な乙女ゆえに、乱れた一面はより鮮烈だった。

「な、なんてエロい女なんだ。ロストバージンでもうヨガってる！」

「とんでもねえ女だ。恥女ってんのも納得だぜ」

ビキニ美女の生本番に客も大賑わいだった。あまりの痴態に興奮を隠さず勃起を取り出してシゴいている者までいる。

さらに、男が身体を入れ替えると、観衆はますます興に乗ってきた。

「おら、次はお前が上になるんだよ。入れて欲しけりゃ自分で腰振りなっ」

「あっ？　やっ、そ、そんなあぁっ」

巧みな強要によって、渚は膝立ちにされ、騎乗位に変えられてしまった。

一種の女性本意の体位であり、ある程度自らの意思で動くことができる。その気になればやめることだってできた。

しかし渚は結合を解かず、腰を沈めて雄を咥え込んでいた。

（い、いやっ！　コレ、気持ちいいのおっ！）

すでに彼女は、己の欲求に素直になっていた。ここまで堕ちたのだ、今さら何を隠す必要があるというのか。

だから美女は、騎乗位で懸命に腰を振る。パンと張った臀部が弾けて雄の突き上げにウットリと浸る。

「おおっ、いいぜ！　チンポをグイグイ締めやがる。デカイ乳も揺れていい眺めだぜ」

横井を悦ばす巨乳も、今は艶かしい縦揺れを繰り返していた。ぶるんたぷんと音を立てては、ビキニから零れ出て桃色乳首を躍らせている。

そして、エラに肉ヒダを引っかかれるたび、女ははしたない涎を垂らしていくのだ。
——ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ！
「あひっ、あひっ、あああんっ！」
「お、おおぉ、峰もスケベになったのか。そ、そそられるなぁ」
と、そこに体格のいい男、諸橋が歩み寄ってくる。彼もまた全裸で、そそり立つ男根もむき出し。どうやら浅海を犯し終えたらしく、棒全体がネットリと白濁していた。
彼の言うとおり、最初の獲物はすでに肉欲に搦め捕られている。
これに満悦した男は、その、逞しすぎる肉棒で渚の乳房を小突いてきた。
「ひんっ⁉　ああまたおちんぽおぉっ？」
「こ、こっちもシテくれよ。おま○こも好きだけど、おっぱいも好きなんだ」
そう言うと、彼はビキニから零れた巨乳を掴み、くぱりと谷間を開いてみせる。
そして深い谷間に、ズブリとペニスを埋め込んだのだ。
「はあぁぁああっ⁉　ムネぇ、おちんぽにいぃぃ？」
「お、オレのちんちん、デカいおっぱいでパイズリしてくれよぉ」
——むちゅりっ、にゅむむにゅっ。
浅黒い亀頭が白い谷間を滑ってくる。戸惑い、霞んだ瞳で見下ろして、美女はまた胸を高鳴らせていた。

「あああ、おっ、おおきいいいっ。か、硬いい、熱いいいっっ」
それは、とても入るとは思えない巨根だった。まるで肉製のペットボトルで、一目で処女を圧倒してくる。
だが、こんなものに相棒が愛でてもらえたと思うと。
（ど、ドキドキしちゃうっ！　アソコもムネもうずうずしてっ！）
理性とは別の場所で女の本能が妖しく蠢き、思わず喉を鳴らしてしまう。すでに理性が霞んでいては、なおのこと本能が性欲を支配していた。
渚とて大人の女。パイズリがどんなものかは知っていたが、女が悦べるものとは思っていなかった。
しかしどうだろう。散々乳腺に溜められた疼きは、ペニスを擦るたびに熱く癒やされていくではないか。
しかも男が感じる様も、女心を妙に刺激してくる。もとより女という生き物は、心の昂りこそ最高の快楽なのだ。
「はあぁ、あぁ、きもちいひいいい、ムネぇ、おっぱいすれるぅぅ……！」
だから、渚は矢も盾も堪らず両手で乳房を握り込んだ。そのまま餅のようにこね回して、眼下の肉棒をシゴきたてる。
――ずちょっ、ぐちょぐちょにちゅたぷりっ！

「お、おぉおぉおおっ！　さ、さすがFカップだな、さ、沢垣とは大違いっ」
「はあ、はあ、そ、そうでしょお？　わらしのおっぱい、おおきくてきもちいいれしょおっ？」
羨むほどの美人相棒を、上回る魅力が自分にはある。そう褒められた気がして、ますます昂ってしまう豊満美女。
事実、彼女の乳房は淡く色づいて、汗を垂らして輝いていた。テラつく乳肌、たっぷりと張りのある膨らみ、ビンビンに尖った乳首なども雌の色香で溢れかえっている。
「はあ、はあ、おっぱいぃ、おま○こぉ、きもひいいぃぃ、あらま、おかしくなっれぇぇ？」
（な、何もかも、忘れたい？　ううん、忘れたくないっ！　こんな気持ちいいの、やめたくないよおおっ！）
今や渚は、恥辱を現実逃避とさえ見れなくなっていた。
皆に注目されながら腰を振り、男を咥えて乳房で愛でる。その、圧倒的な淫戯と興奮に心の底から酔いしれていく。
だからだろう。エキサイトした客が我慢できずに駆け寄ってきても、拒もうとなど微塵も思わなかった。
「な、渚ちゃん、お願い、オレのもっ！」
「な⁉　ずるいぞおれもっ！」

「おれもおれもっ！」
「ああぁ、おちんぽぉ、いっぱいぃぃ」
空いた左右から次々と殺到する、そそり立った男根たち。
そのどれもが、自分に首ったけで待っている。そう思うと、甘い愉悦で溢れかえって舌がトロンと垂れてしまう。
「いぃ、いぃよぉ、ちょおらあい、わらしにシゴかせてぇぇ」
——ぎゅっ、しゅっしゅっずちずちょっ！
「おおおっ！　いいっ、渚ちゃんの手、気持ちいいっ！」
躊躇いなく伸びた美女の手が、彼らを握り込んでシゴいたのだ。そう、居並ぶ男らの男根たちを。
それは初めての手淫だったが、色に狂った雌選手は熱く巧みに愛でていく。サオを握り、エラのくびれを引っかけながら滑らかにシゴいていく。
もちろん男たちは快感で腰を震わせる。細い指は、男のそれとは段違いの柔らかさと繊細さがあるのだ。
しかし渚もまた、伝わる恥熱と脈打つ血管に雌の肉欲を刺激される。本能のみとなった雌にとって、雄の求愛こそ至極の悦びとなるのだ。
（だ、大好きいいっ！　おちんぽ好き好きだいすきいいいっ！　もお気持ちよすぎるうう

うっ！）

もはやビーチは自分のもの。ビーチのペニスは自分のもの。そんな歪んだ優越感が、勝気な美女を恥辱の虜に変えていく。

もう渚には、人らしい羞恥もビーチバレー選手という肩書きもいらない。ただ男根を貪り、掴み、粘つく膣肉で絡みついて絶頂への階段を駆け上がるのみ。

「はあはあはああ、おっぱいぃ、ゆびぃ、ま○こぉ、きもひいぃ、イギたいのぉぉぉ」

立て続けにイった女体は、快感なのになかなか頂に昇れない。猛烈なもどかしさが募ってクネクネと腰躍らせるビキニ美女。

すると、これまで任せっきりだった横井が尻を掴んで、

「よおし、それじゃそろそろ、イカせてやるぜ！」

――っずんんんっ‼

「んごおおおおっ⁉」

一度抜けそうになったところを、思いっきり突き上げて串刺しにしてきた。胎に過激な媚電が走って一瞬視界が明滅する。

深々と刺さったペニスが子宮を強引に押し上げたのだ。それはもうすごい衝撃で、腰骨が壊れたような錯覚さえあった。

だが、今の渚には壊れた感覚さえも極上の肉悦だった。潤んだ子宮まで犯してもらって

甘すぎる快感でいっぱいになるのだ。
「きぃぃぃ、きもひ、ひぃぃぃぃ。あらま、おくぅ、こはれひゃうぅぅ……！」
丸い瞳が裏返って淫らな雌だと誇張する。どこまでも、壊れていく。
豊かな肢体が前のめりになり諸橋の腰に縋りつく。ブルブルと、しかしウットリと、子宮快楽に打ち震える。
そして、その隙をつくかのように、背後に新たな男が纏わりついてきた。
「いいっすか横井サン？　おれ、アナルも好きなんっす」
どうやら観衆の一人らしい。彼もまた勃起しており、横井の上に跨がるように美女の後ろを狙ってくる。
「いいぜ、ビーズも抜けたしヤっちまいな」
「あ、ありがとうっす！　じゃ、いただきます！」
「ひ、ひいい!!　しょこわあああっ？」
パックリと開いた皺の孔に、ツプリと亀頭が押し付けられる。涎を垂らしまくって美女は慄いた。
しかし男は獣の交尾のようにしがみついてきて、そのままズブリと押し込まれると。
「ひぎぎぎいいいいあああああっ!!?　おじりごはれりゅうううう!!」
――ずぶっ！　ずぶずぶぶぶずちゅっ！

物すごい粘膜音と共に、腸内が熱く侵食される。強烈な熱刺激に狂ったような悲鳴を上げる渚。

（お、おおお……おま○ことオシリに、ふたつぅぅ。しゅ、しゅご、いぃ、あたま、壊れ――！）

パクパクと金魚のように口が喘ぐ。目の前が真っ赤になった。臀部が膨らむような気がして膨張感も半端でない。

実際、誰が見ても衝撃は明らかだった。垂れた舌からはとめどなく涎が零れてはしたないことこの上ないし、瞳は何度も白目を剥いて壊れたとしか思えない。

だが、ここまでされても。

「あ、あひ、ひひぃいいいいっっ、い、いいれふぅぅ、きもじ、いいれしゅぅぅぅ」

いや事実、壊れたのだろう。美女の理性は微塵に粉砕されて、トロンと蕩けていく目尻が被虐的快楽を物語った。

それを悟った横井と諸橋も、最高の勝利と感じて腰を振りたてる。

「おらおらあ！　このままイっちまいな！」

「げ、へへ。デカパイもいっぱいシゴけよな」

――ずちょっ！　ぐちょぐちょぢゅぶぢゅぶずちずちぬちょぬちょっ！

――ぷりんっ！　にゅぷにゅぷたぷたぷぬるっぽぬるっぽ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/